

前橋ファン共創セッションコメント

アートコミュニケーションディレクター
小池アミイゴ

たれロマン

歩く 走る 風街攻略 まえばし しあわせ 1 週間

7 月 30 日の 6 班の発表を聞きながらメモしたものから、気になるワードを取り出し組み合わせてみました。

「たれロマン」、県外者が聞いたら「なんじゃこれ？」ですよ。ボクもそう思います。

ただ「街づくり」ってうまくまとめるより、破壊要素があった方が面白いなと。

「破壊」が極端だとしたら、「色気」とかでもいいんだけどね。

ともかく、良いものに良いものを足して行くと、最後は何も無くなってしまうこと、あるあるです。

この総評は 6 班に対するアンサーを書き上げた上で、ぼけ～っとした思考の中をフラフラ歩きながら、答えを先回りしないよう考えています。

まず、3 班が発表の中で語った『前橋ファン共創セッションにこれだけ集まる事実』に今回の回答があるように思いました。

前橋の街に対する危機感が人を動かしている。

それは民間が主導するアートによる街の更新にも、現市長が進めようとしている「子育てしやすい街まえばし」にも、こうしたセッションの背景にもあるはずです。

危機をポジティブに転化して行く作業は一筋縄ではいかず、今回の発表を受けてどの班のアイデアを事業化したら解決するってことでは無いと直感しました。

それにしても、どの班のアイデアも課題の尻尾を掴んだ面白さがあるなあ～。

7 月 30 日は、ボクたちアドバイザー 3 名と市長と副市長が発表の感想を語る会でした。

でも本当に面白かったのはその後の懇親会。

あのわちゃ～～とみんなが語り合っている現場が生れたことが、素晴らしいなあ～！今日前橋に来てハッピーだなー！と思えました。

この現場、他の街に暮らしている人が見たらなんて思うだろう？

ボクは「前橋で暮らしてみたい」と思う人がけっこういるんじゃないかと思うんです。

なのでひとつ。

こうした企画の発信こそ、丁寧に、大胆に、洗練を持って行えたらいいよなと思いました。

「丁寧に、大胆に、洗練された発信」

これこそアートや芸術、デザインや編集などが活躍する分野です。

アートや芸術、デザインや編集は、人と人をつなぐ行為であり、過去と未来をつなぐハブであり、1 人ひとりの「その人らしさ」の確認の現場です。

アートや芸術、デザインや編集などを効果的に使うために、それを悪戯に崇め奉るでなく、大都市圏のカッコつけに溺れることもなく、目的を持って肅々と利用すること、「利用出来ること」が必要とされる時代と思います。

9 月に開催される国際芸術祭、市民がこれをうまいこと使い倒した時、「やってよかった」と思えるはずです。

と、ここまでの思考フラフラ歩きはアートに接続したのか～。

さて、あらためて 6 班の発表に対する自分の感想と提案を振り返ってみると、「自身」を語るより「他者」を語ることに魅力を感じているなあ～と。

「わたしはこれだけすごいんだ！」という発信と、
「わたしはこれだけのものを愛している」という発信。
短期的には「わたしすごい」が映えた消費を生むんだと思うけど、
前橋にはフィットしないんじゃないかと。

そうした懸念は、6 班すべての発表に通底してあるように感じました。

「まえばし、こんなにすごいんだぞ！」という発信と、
「まえばしはこれだけのものを愛しています」という発信。
どっちがいいんだろう？
どっちの街で暮らしたいと思うかな？

地政学的な視点で見た「前橋」は日本の中心あたりにあって、大都会でも極端な田舎でもない、どっち付かずな存在かもしれないけれど、日本各地にその愛の視線を向けやすい場所にあるよな～と。

それを強みに出来るのか、どうか。

そんなことを、6 班の発表を通し考えていたんだろうなんて気がついた今です。

そんなことを考え続ける先で、
「まえばし、なっから いいとこ あるんさ ね～♪」なんてワードが、人の耳を優しくくすぐる唄にまで成長したらいいな。

先当たってどのアイデアを事業化するのか？ということに関しては、
全部すぐにでもやれることばかりだなと思うばかり。

ただ、それぞれの班の良いところをハイブリッドすることで、その効果はより確かなものになるはずです。

6 班のアイデアは、自分がアートコミュニケーションディレクターとして取り組んでいることと重なるので、ぜひ力を合わせてやってゆけたらです。

4 班に対するアイデア、まえばし国際登利平鳥めし弁当パッケージデザインアワード 2027
実現したら面白いな～

実現しなくても、前橋にとって「たれ」とはどんなものか？
人と人をつなぐ「たれ」

その人らしさを引き立てる「たれ」
多様性に合わせて使い分けられる「たれ」

引き続き考えてゆきたいです。

という、ぐだぐだの回答でごめんなさい。

1 班「なっからいいところあるんさね、まえばし」

#なっからいいところあるんさね、まえばし

これは、このワードを使い発信するだけでなく、発信をきっかけに人の交流を生み、交流に必要な場を増やし広げる。そうすることで発信をより確かなものに育て、前橋の魅力を磨いてゆく。

そんな循環を感じる建て付けと思います。

この発想はポジティブで、出来る人がどんどんやったらいいですね。

そんなポジティブな感想と裏腹に、「なっからいいところあるんさね、まえばし」というワードは県外者にはちょっと発語しづらいかなと。リズムがとりずらくスコンとフィジカルに響いてこないイメージで、ちょっと距離を感じてしまうよう思いました。

7 月 30 日の発表では、ボクが知る群馬の女性そのままに、“なっから”をタメ気味に「なっからいいところあるんさね、まえばし！」と元気に発語されていて、それはそれで「懐かしいなあ〜」と思いつつも、圧も感じてしまって…

これからのことを思うと、言葉の響きにもうちょっと余白が欲しいなと。

試しに発語して気持ち良いように言葉を並べてみたら

まえばし

なっから いいところ あるんさ ね〜

でした。

(音節と音節の間の 0.5 呼吸の間で「サウダージまえばし」味が増すはず)

これはボクの嗜好なので、参考にならないはずですが、

「この言葉、まず誰が口にしたら気持ちいいんだろう？」

「あの人が使っているか、私も使ってみたい」そんな気持ちになれる人って？

そんなことをみなさんの発表中に考え続けていました。

それは市長？ぐんまちゃん？ウィッチーズ？

いやいや、街の人や農家さん？？

うーむ、

そういう属人的なことじゃないのかも…

が、ここでひとつ確信。

きっとこの言葉を使って発信する際、1 人ひとりが今まで生きてきた中で一番やさしい気持ちで

「なっから いいところ あるんさ ね〜」と発語したら、気持ちいいよなあ〜。

元気だけど優しい。そんな声。

そんな声がネット上に溢れる「地域のお店紹介動画」のひとつから聞こえてきたら、印象いいよな～。

そう考えたところで、ふと。

紹介されたお店の店主さんが、次にお薦めの店を紹介するんです。

その際やさしい発語で「なっから いい店 あるんさ ね～」と言ってから、自分の推し店を紹介する。

そんな「なっから やさしい 紹介リレー」をやったらいいんじゃないかと思いました。

優しい言葉使いで「わたしの好きな店」を語ってくれる「なっからいい店」の店主さんが連なる街。

行きて――！！

です。

2 班_まえばしクエスト

「歩く」にフォーカスした発想、とても好きです。

「歩く」に「職業」を紐つけた発想も秀逸と思いました。

ボクは歩くのが好きで、それは、車の移動で見落としてしまうものが「もったいない」と思う貧乏性からくるはず。

ある街でイベントをする際は、その現場まで人はどうやって辿り着くのか？太陽はどこから登ってどこに沈むのか？川の流れや風の向きは？駐車場から何歩？駅から明日りて何分？使えるトイレはあるか？などなど、自分が街を纏うまで街を歩きます。（それでたまにぶっ倒れることもあります。）

そうすることで「人はどうやって何を思いその場所に辿り着くのか？」という1人ひとりの街物語を尊重した現場創りをすることで、会場にその街ならではの空気を醸成させます。

そんな時と空間は、やはり愛しいものですよ～。

昨年前橋の敷島のフリッツアートセンターで展覧会を開催した時は、前橋駅からまちなかへ、馬場川を下り、広瀬川を遡り平和町を抜けて敷島まで。帰りは利根川沿いを歩いて前橋駅へ。そんなこんなのコースを何度か歩いて、「前橋で展覧会を開催する意味」「前橋の人はなぜ前橋で暮らしているのか？」を探りました。

そうして展覧会を開催してみて思うのは、やはり車移動が中心の前橋の人は『街を纏わずに来るんだな』ということ。

家を車で出て、いくつか目的の場所(点から点)を経由してギャラリーまで。

そうして来られる方は「その人そのもの」の姿でボクの前に姿を現す。

そんなポジティブな捉え方が出来る反面、街の空気を纏っていない分、会場がその街らしさで満たされない。「もっとこの場所が前橋で満たされたらいいのにー！」なんて思ってしまう俺っす。

今回の発表で街の「攻略」というワードが語られ、それは面白いと印象に残りました。

では攻略するとどんなことが起こるのか？

発表ではポジティブで能動的な回答が示されていますが、それに加えて『前橋を歩いていたら期せずして纏ってしまったまえばしの街』みたいなことも起こればいいなと思いました。

そうしたことの実現に「職業」って役に立つなと。

職業で街を歩くことは、個人であることと別の視点を持つ必要があり、またその職業ならではの限定された経路を歩く必要もあるでしょう。

そんな制約の中で、ふと見つける「その人にとって好ましい」ものや風景は、人ひとりを生かす力になるものです。

逆に、職業的な視線でキャッチする「これがあればいい」とか「これは必要ない」みたいな発見は、個人的エモさを省いた他者と共有しやすいものでもあります。

絵描きという職業の目で前橋駅から敷島まで、そして前橋駅まで歩いて帰る自分は、たとえば、美しく景観が整えられた広瀬川を遡りなんでもない住宅街を歩く際、どなたかの家の塀に沿って綺麗に草刈りされた中に、切られ咲いている花を見つけます。

それは顔はわからぬも、善良なる人との出会いです。

そんな発見はボクに「まえばし」という気持ちのいいシャツを纏わせてくれます。

前橋で1週間、任意の仮想職業に就いて、その職務を果たしながら街を歩き、良きものにも悪きものにも出会い、最後の夜に街を纏ったもの同士で雑談を交わす。

そんなプログラムがあったら、参加してみたいな～。

じゃあどんな職業？

自分なら市のゴミ収集の仕事とかやってみたいです。

3 班_#好きです前橋

『前橋ファン共創セッションにこれだけ集まる事実』
ここにこのセッションのひとつの回答を感じました。

ではなぜこうしたセッションに人が集まるのか？

その理由のひとつは「危機感」ですよ。

前橋のまちなかが失われてしまったような状況を目の前に、多くの人の「まえばし、このままじゃいかんべ！」と思う力がこうした現場の背景にあるはず。

東日本大震災発災後の東北には、こうした熱心なディスカッションの現場がいくつも生まれて、ボクはそんな現場から地域を引っ張る人が何人も発見されるのに出会ってきました。

未曾有と言われた自然災害と原発事故の危機に直面するも、当事者意識を失わず考え続けてきた人。人の命の尊さを突きつけられた人たちは、他者の話を聞く力を身につけ、そのことは1人ひとりが尊重されたコミュニケーションを生み、結果1人ひとりの必要が反映された街が育ちます。

ボクが今わざわざ行く街は福島市です。

震災直後から「福島、どうしたらいいのか？」と考え続けた人たちが、福島市の大町というエリアをとて魅力的な街に変えています。それは大きな開発じゃないけれど、いつ行ってもちょっと良い変化が起きていて、「おかえりなさい」と言ってくれる人たちがいて。そんな人が「あっちの店ものぞいてみてください」なんてことを言ってくれる。

今回の3班の発表では、前橋の魅力を俯瞰的に見た冷静な分析に共感を覚えました。
その冷静さの上に「健やかおせっかい」というワードを乗つけたのが楽しかったです。

では「健やか」ってなんだろうと考えた時、福島市で出会ったみんなの顔が思い浮かんだのです。

もしくは、
2000年代前半、ボクは福岡に完全にハマっていました。

バブルが弾けて経済が傾くのが遅れてやってきた福岡県を中心部。
90年代後半くらいになると、200万円貯められた若者が自分の店を出せるような状況にあったそうです。

2003年にボクが都内で開催した音楽イベントが大好評で、福岡でも開催してくれってことになりました。

東京のものをそのまま地方に持ってゆくのはカッコ悪いから、福岡でやるなら街の人と一緒に創りたいとお願いすると、福岡薬院のカフェと天神の古着屋を紹介してもらいました。

そうして作ったイベントは、その後の福岡の、もしくは日本のイベントの雛形のひとつになったはずです。

が、話はここからです。
そうして紹介してくれたカフェや古着屋の若いみんなが、次から次と色々な店や人を紹介してくれるんです。「うちは今度でいいから、友人がやってる店で食べてみてくれ」って。
で、そうした人たちとライブイベント作ろうとすると、いくつかの店が連携し、それぞれの店で経費を分け合い、たとえば3つの店で経費を負担しあったら、それぞれ3つの店でライブが開催されちゃう。好いものは独占するでなく共有する。
東京から福岡に行くアーティストにとって、それはうれしく有難いことです。
そして、そうした人の輪の中で表現が開き成長する東京のアーティスト！

「健やかにおせっかい」というワードで思い出した福岡の人の輪は、九州全県に広がって。
その噂を聞いた東京の人たちが九州行きまくるカルチャーが生まれました。

というエピソードですが、前橋が今後「堂々と言ひふらす(語る)」べきものがどんなものであるべきかの参考になればいいな。

それはきっと「新幹線が止まる」とか、「立派な城が建っている」とか、「映えるテーマパークがある」みたいなことでは無いんだろうと想像できます。

4班_登利平をきっかけに前橋のファンを増やす体験づくり

4班、パワポ資料では上記のタイトルだったけど、事前に配布された発表次第には
“「たれ」がつなぐ、人とまえばし〜水と緑とたれのまち〜”と書かてれていて、
一瞬「たれ」ってなんだっけ？みたくなかったのが面白かったです。

で、実際に発表が始まったら、それは「登利平」の「たれ」であることがまた面白くて、

一気にテーマパークまで飛躍した発想もおかしくて。
しかし、発表の最後の方では「たれ」が薄まってしまったのは残念。

が！

その後に続いた 5 つの班の発表を聞きながらも、「たれ」のことを考えてしまっていたのは、やはり「たれ」にフォーカスしたことの勝利か、はたまた自分が群馬出身者だからなのか？

あらためて、登利平のブランド力を高めることで前橋をブランディングしてゆくことは、ガンガンやったらいいと思いました。

ただそれ以上に興味を持ったのは、これだけ前橋の人に愛される登利平の鳥めし弁当はどんな時に食べられ、そこにどんな幸せがあるのか？ということ。

運動会などの催し物や冠婚葬祭などなど、あらゆるシチュエーションで登利平の鳥めし弁当が提供されたとして、前橋の人がみな「今日は登利平なんだね！」と喜ぶことは想像できる。

それはどんな喜びの形をしているだろう？

逆に「今日の昼メシは登利平の弁当を出してあげよう」と考える主催者は、どんな心持ちでいるんだろう。

登利平の鳥めし弁当そんな人間物語を纏った姿を魅せることで、それはただ食べて消えてしまうものではなく、前橋までわざわざ食べに行きたくなるものになるんだろうな。と思いました。（先輩弁当「峠の釜めし」が纏う物語の素晴らしさ！）

そこから一気に飛躍し、あらためて「たれ」です。

そういや群馬ではうどんや蕎麦の汁のことも「たれ」って呼ぶおちゃんおばちゃんがいたはずだなど。調べてみたらやっぱり「蕎麦のたれ」と言う文化はありました。（昨今「日本の常識に合わせて「汁」と呼ぶべき」みたいな業界内での啓蒙が進んでいるようだが…）

そういや「焼きまんじゅう」は「味噌だれ」、みたらし団子に塗られているのも「醤油餡」ではなく「醤油だれ」。そうだ！東京に出るまで焼き鳥は「たれ」であり、「塩」なんて思い浮かなかったぞ！群馬。

「甘じょっぱい」というより「しょっぱ甘い」という方がしっくりくる群馬の「たれ文化」

野菜や食肉など良質な食材が生産されている群馬（前橋）ですが、それらの日常での調理法はザクっとしていた、言葉を選ばなければ「雑」というイメージさえあった子供の頃の記憶。

なんだけど、元々良い食材なのだから「みんなそれぞれの好みで「たれ」につけて好きに食べばいいじゃねえか」みたいな考え「も」あったように思います。

そして「良い食材」を「まえばしの人」に置き換えると？なんて妄想。

前橋に移住された方や仕事で来られた方が「まえばしの人、みんなやさしい」と語るのをよく聞きます。

（「群馬、雑！」と嫌って東京に出てしまった自分からすると「そうなんだ〜！」という驚くばかり）

その「やさしい」はまさに「素材の良さ」みたいなものじゃん！

しかし、それだけだと「まえばし」も「人」もなんだかぼやけた印象のままだな〜、と。

で、ふと、

その「やさしいなにか」「ふわっと良いもの」に輪郭を与えるのが「たれ」なんだろうなと。

良いたれは、素材に「足す」というより、素材の良さをより明快に味わうための輪郭を与えるようなものなんだと思いました。

「その人らしさ」に何かを足して(盛って)映えさせるでなく、
「その人らしさ」が際立つ「たれ街まえばし」

そんな街が実現したら面白いな～！なんていう、登利平テーマパークより深淵なワンダーランドを想像してしまった俺です。

では人にとって「たれ」とは。

その人らしさを失うことなく、その人らしさに輪郭を与えるもの。
今の時代、アートや芸術こそ人にとってのタレのようなものなんだろうと、4 班の発表レジュメを見返して気がつきました。

もしくは、レジュメでは芸術祭に登利平を潜り込ませるようなアイデアがありましたが、芸術やアートというものに対しちょっと距離を置いてしまうであろう少なからずの人を、芸術やアートに楽しく美味しく接続させる力が、もしや登利平の鳥めし弁当にありやしないか?? などという妄想がモクモクと。。

そうだ！いっそ芸術祭参加アーティスト全員にそれぞれ登利平鳥めし弁当のパッケージデザインを提案してみるのはどうだろう？

え、今からじゃ無理…

だよな～。

でも、あのフォーマットして完成された長細くスマートな鳥めしの弁当箱に、最先端のデザイナーやアーティストから子供の絵まで、何十種類のデザインが施されたの、見てみたいな～

たれの街まえばしが主催する「日本たれサミット」の目玉企画、
“まえばし国際登利平鳥めし弁当パッケージデザインアワード 2027”

県外者は「グンマーは鳥めし食ってるんだ」と気がついてくれるはず。
その展示会はアーツ前橋での展示終了後、日本の駅弁が集まる東京駅の東京ステーションギャラリーで開催。
グランプリ作品はニューヨークの MoMA に収蔵してもらいましょう。

という「たれ」をめぐる独りブレスト、てか妄想が生まれた発表、おもしろい。

5 班_前橋、移住だ、タコだ

「まえばし 1 週間滞在プログラム」というのが秀逸だなと思いました。
「移住」と「けんか風」が接続して語られているのかな？とわくわくして聞いていましたが、これそれぞれ独立したアイデアということなんですね。

でも何か突破口がありそうだなと。

「まえばし 1 週間滞在」ということに関しては、2 班の「まえばしクエスト」とアイデア交換し

たら面白いと思ったので、2 班に対するボクの考えものぞいてみてください。

前橋の魅力は観光ではなく「暮らしやすさ」という捉え方も、とても共感を感じることです。

発表を聞きながら、ではどうやって「まえばしならではの暮らしやすさ」を言語化するのか？
なんてことを考えていて、たとえば街を人に置き換えたらどうなんだろう？なんて思い、なん
やかな想像してみました。

ある人が「私は一緒に暮らしやすい人です」と語ったとして、「誰かと暮らしたい」と願ってい
た人はどう考えるのか？

まず思いつくのは『他の暮らしやすそうな人と比べてみる』だよな。

比べてみて、「やはりこの人が暮らしやすそう」と思えたとして、実際に一緒に暮らすまでの幸
せな物語が必要だよな。

(幸せとは言えないけど、デートの際につい笑ってしまうほどのとんでもないゲリラ豪雨に遭っ
て、そんな”吊り橋効果”から「この人と暮らそう！」と思っちゃうことは～、ある。)

じゃあ「幸せな物語」とはなんだろう？

ここに「けんか風」が接続出来たら面白いのだが、
う～～む…

で、ふと、暮らしやすい人の個性を変えて考えてみることに。

「私は多くと一緒に暮らすと幸せになれるであろう人を知っています」
こんな人はどうだろう？

そんな人と話をしたら楽しくないですかね。

あらためて前橋に置き換えて置き換えてみて考えると、
「前橋は日本各地の暮らしやすい街と仲良しです」

前橋にゆくと、

「みどり市も住みやすいつて人気なんですよ」

「川場村は道の駅の充実や地域創りが素晴らしいです」

「徳島の神山町はネットや教育インフラの整備が充実していて大人気です！」

「熊本の南阿蘇も農業移住者増えてますよね」

「渋谷区、子ども政策うまくって、小学校の児童数増えてるんだってさ」

なんて情報が、前橋の街や自然に触れながら得られる。

そんな街、魅力的だな～と。

そして会話は「じゃあ前橋の魅力は？」

まえばしの街のあちこちのカフェで、食堂で、ギャラリーで、ホッピーBAR で、そこに偶然居合
わせた人たちが語り合う。そんな会話の先に「前橋も選択肢のひとつですね」なんて自然にポ
ロリ。

ということは、

前橋は「日本暮らしやすい街連絡協議会」を設立して、
その議長市になればいいなと。

それと同じことは「風」でも出来るかと。

「日本風街連合会」を設立し、
日本の風つよエリアとその風文化を紹介する街になることで、
「風つよまえばし」というアイデンティをポジティブに発信する。

日本各地で「風が吹くから前橋ったい」とか「前橋は風街じゃけん」みたく言われたらいいな。

ちなみに、昨年前橋を隅から隅まで歩いて取材して気がついたこと。
「前橋の中高生は自転車を立ち漕ぎする」
です。

これは冬の空っ風に向かうことで身についたことなんだろうと。
穏やかな秋の駅前交差点の信号が青になると、少なからずの学生が、強い風が吹いてるでも上り坂でもでもないのに、立ち漕ぎで横断歩道を渡る。
こんな他他の街では見かけないことです。

自転車立ち漕ぎ
風街まえばし

そんな街、ちょっとキュンとします。

6 班_前橋の日常を学びに変える

この発表の発想は、現在文科省が進める「子供たちの自主的な探究的学びのカリキュラム」で学校に求められているはずです。

自分が暮らす渋谷区ではこうした探究学習を「シブヤ未来科」と名付け、小学4年生から中3まで午後の授業がすべて「シブヤ未来科」に当てられ、建前上は「子供たち1人ひとりが学びたい探究課題を決めて、個人的な研究やチームでのディカッションなどを重ね課題解決を得る」学びが行われています。

そのテーマ選びの中でも「地域の課題」はとても良く取り上げられます。

渋谷区なので「ゴミのポイ捨てや落書きの問題」を子どもたちで考えるようなことが多く、そうしたネガティブな課題を解決をする発想が育つことで、自然と地域への愛が深まるようなことが起きています。

ゴミを「減ら」すとか落書きを「消す」とか、引き算の思考から生まれる地域愛というものはあります。

ボクはこうした子どもたちの授業に呼ばれることが多いです。

正規の授業時間に教員免許を持たぬボクがやることは「1人ひとりが本当に願っていることをアウトプットさせる」こと。そうすることで「1人ひとり本当に願っていることを探究テーマする」ことに繋がります。

(子どもたち、放っておいたらオトナが喜ぶ正解を語ろうとしちゃいますしね)

そうしたことの実現のために、ボクの本業である絵を使います。アートや芸術、デザインやイラストレーションは、ただ美しい何かなのではなく、人の発想やコミュニケーションを整理す

るのにとっても役立つ道具なんです。

現場でボクがどのように語り振る舞うのかは、ごく属人的な経験や能力によるものなので説明出来ないのですが、ただ「紙に1本の線を描く」ようなことだけで整理出来ることはあって、それは「絵を描く」という足し算の行為のようで、余計な発想を整理するような引き算の行為だったりします。

6 班の発表では、

「魅力は与えるより自分で発見する方が強い」と明記されていますが、まさに自分がアートを使って子どもたちとコミュニケーションすることはそれが目的なんです。

大人が輝く未来を語り子どもを導ける時代は終わっています。

しかし、

前橋は日本の中で最も子どもたちが自主的な探究心を盛った学びを進めている。

そんなことが言えたらすごく魅力的な街に見えますよね。

ただ大人として懸念に思うことがあるはずです。

そんな自分勝手な学びをやっていたら、これまでの国語算数理科社会の学力が落ちてしまうじゃないか！

高校受験を考えたら、そんな危なっかしいカリキュラムは認められない！

そう考えるのはわかります。

が、自分が渋谷区で向き合う子どもたちは、今まで以上に従来型の授業科目の成績を上げているんすよね。

それはやはり、自分で考えることで何を学べばいいのかの選択がうまくなる。ということなんじゃないかなと。

もしくは、記憶学習が得意の人はその力をさらに伸ばす。記憶学習が苦手な人は、その人なりの能力を伸ばす。

1 人ひとりの違いが尊重されつつ、1 人ひとりその人なりの能力が伸びる街、まえばし。そんな街に暮らしたいぜ。

そうしたことを実現するために、市内の高校や大学、専門学校には、そうした学びをしてきた人を尊重した受験のあり方を考えてもらう。

大学を「A ラン」「F ラン」みたく差別的に語り、子どもたちを当てはめるようなのではなく、子どもたちが本当に学びたいことが前橋にはあるってことを、6 班のような発想を持って変えてゆけたらいいなと思いました。こうしたことを行政、教育委員会、学校、さらには一般企業も面白がって一緒に考えてくれたら、さらにいいし、こうしたセッションの目的のひとつは、行政の縦割りや民間との壁を飛び越え発想を進めることにありますからね！

ちなみに、自分が前橋市のアートコミュニケーションディレクターとして取り組んでいることは、6 班が目指すことと丸かぶりなので、ボク主催の子ども企画、ぜひ覗いてみてください。

